Osaka University Knowledge Archive

Title	ネイションをめぐる旅 : 太宰治〈津軽〉
Author(s)	滝口, 明祥
Citation	太宰治スタディーズ. 2023, 7, p. 138-152
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/92826
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ネイションをめぐる旅
——太宰治〈津軽〉

滝口明祥

キーワード：太宰治　風土記　風景　故郷　ナショナリズム

この叢書は、文壇を始め各界のすぐれた方々に、おのが故郷を風韻豊かな風土記に再現して戴き、時代の痼疾に蝕まれて故郷を失うた近代人の胸にふたたび故郷への愛着をよびさまし、なほ進んでは、神のみ手に生みなされた、うまし国たる日本を、あらためて見いださんがためにつくられた。

この広告文を、一九三〇年代以降における〈故郷喪失から日本回帰へ〉という流れをきわめて適切に要約したものだと評価することも不可能ではない。「故郷を失つた文学」を小林秀雄が書いたのが一九三三年、翌年からはシェストフの流行とともに「不安の哲学」や「不安の文学」ということがしきりに言われ、「三〇年代後半に入ると、一部のリベラル抵抗派を別にすれば、[…] いわゆる「日本への回帰」現象が顕著となった」[2]。故郷を

知られているように、太宰治の『津軽』（一九四四・一一）は小山書店の「新風土記叢書」の一冊として刊行された。それは、宇野浩二『大阪』（一九三六・四）、佐藤春夫『熊野路』（一九三六・四）の二冊が出されたのち、数年間のブランクを経て、青野季吉『佐渡』（一九四二・一一）、田畑修一郎『出雲・石見』（一九四三・八）、中村地平『日向』（一九四四・六）、太宰治『津軽』、伊藤永之介『秋田』（一九四四・一一）と続いていく。なお、『津軽』の前に刊行される予定だった稲垣足穂『明石』（一九四八・四）は印刷はされたものの空襲によって消失したため、戦後の刊行となった[3]。

『出雲・石見』および『日向』には、次のような広告文が付けられている。

喪失し、「不安」に漂う人々にとって、そうした自身の空虚を埋めてくれるものとして「日本」が発見されていくのである。『大阪』、『熊野路』刊行時の広告文には「現代流行の所謂日本精神の空疎を救ってそれを生きた具体的なものにする」ためにこそ「地方」を知るべきであり、そうした「特殊を浸透した上の全体こそ始めて真の全体である」とある（「東京朝日新聞」一九三六年三月三一日）。「特殊」（各地方）を総合した「全体」こそが「空疎」ではない実質のある〈日本〉となるということだろう。(3)

『津軽』という書物は、このような意図のもとに太宰という作家に依頼されたものであり、そのために津軽への旅が敢行されたわけだが、『津軽』のなかで太宰自身を思わせる「私」は、そうした外在的要因よりも内在的要因を強調している。「一　巡礼」の冒頭部分である。

「ね、なぜ旅に出るの？」
「苦しいからさ。」
「あなたの（苦しい）は、おきまりで、ちつとも信用できません。」
「正岡子規三十六、尾崎紅葉三十七、斎藤緑雨三十八、国木田独歩三十八、長塚節三十七、芥川龍之介三十六、嘉村礒多三十七。」
「それは、何の事なの？」
「あいつらの死んだとしさ。ばたばた死んでゐる。おれもそろそろ、そのとしだ。作家にとつて、これくらゐの年齢の時が、一ばん大事で、」
「さうして、苦しい時なの？」
「何を言つてやがる。ふざけちやいけない。お前にだつて、少しは、わかつてゐる筈たがね。もう、これ以上は言はん。言ふと、気障になる。おい、おれは旅に出るよ。」（一）

「死」という意識、それこそがこの旅の動機であるというのだ。そして「私」は少しあとで「都会人としての私に不安を感じて、津軽人としての私をつかまうとする念願」（二）があって旅に出たのだとも説明している。この「不安」というのが、「死」に関係していると見ることは容易い。「五　西海岸」において、父親の生家を見に行く際にも「死ぬまへにいちど、父の生れた家を見たくて」（五）、「いつ死ぬかわからんし」（五）などと語られていることからしても、「死」という意識は「私」において常に伏流していると考えられる。

ここで、「人の死に方がふつう偶然に左右されるものとすれば、人がやがて死ぬということはのがれようのない定めである」とするベネディクト・アンダーソンの主張に耳を傾けよう。偶然性や運命性に苦しむ人々に救いを与えてきたのは宗教であったが、それが衰退した十八世紀に、代わって登場したものこそがナショナリズムであった、とアンダーソンは言う。

この啓蒙主義の時代、合理主義的世俗主義の世紀は、それとともに、独自の近代の暗黒をもたらした。宗教信仰は退潮しても、その信仰がそれまで幾分なりとも鎮めてきた苦しみは消えはしなかった。[…] そこで要請されたのは、運命性を連続性へ、偶然を有意味なものへと、世俗的に変換することであった。[…] 国民の観念ほどこの目的に適したものはなかったし、いまもない。国民国家が「新しい」「歴史的」なものであると広く容認されているにしても、それが政治的表現を付与する国民それ自体は、常に、はるかなる過去よりおぼろげな姿を現し、そしてもっと重要なことに、無限の未来へと漂流していく。偶然を宿命に転じること、これがナショナリズムの魔術である。(4)

宗教が衰退した時代に、それに代わって「死」という「のがれようのない定め」を前にして思い悩む人々に救いを与えたのが「国民」＝ネイションという観念であった。まさしく『津軽』の「私」もまた、「死」を前にした「不安」から、「運命性を連続性へ、偶然を有意味なものへと」変えてくれるものを求めているのだと言えるだろう。つまり「私」が求めているのはネイションであるということになるのだが、それは『津軽』において〈日本人〉ではなく〈津軽人〉と名指される。もちろん、「新風土記叢書」の広告文にもあったように、「故郷への愛着」から「うまし国たる日本」の（再）発見が目論まれているのである以上、〈津軽人〉はより上位の〈日本人〉に回収されるものでしかないのかもしれない。『津軽』については従来、「「津軽の百姓」としての自己確認の書であり、奴婢系を軸とした小説」（大久保典夫）であるとか、「秩序と制度からなる人工的文化的中心から遁走して、反文化的な周縁世界の自然と混沌の中へ自己を「還元」する、一種エロス的な回帰の体験」（東郷克美）などとされてきたが、(5) この作品における〈津軽人〉というものに関する検討が十分にできているかといえば、そうは言えないのが現状である。本稿では、『津軽』における〈津軽人〉の表象のあり方について、作品の展開を追いながら考えてみたい。なぜなら、〈津軽人〉あるいは〈津軽〉という言葉の意味自体が『津軽』のなかでは一定のものではなく、作品内の展開に従って変容していると思われるからだ。そして〈津軽人〉の表象のあり方について考えることは、この作品とナショナリズムとの関係についての考察にまでつながっていくはずである。

一、〈故郷〉と旅人

実は先ほど引用した「一　巡礼」の前に、『津軽』には「序編」が附されている。そこで「私」は「私は津軽に生れ、さうして二十年間、津軽に於いて育ちながら、金木、五所川原、青森、弘前、浅虫、大鰐、それだけの町を見ただけで、その他の町村に就いては少しも知るところが無かつたのである」と述べている。

これは〈故郷〉あるいは〈郷土〉とは何か、という問いを惹起するだろう。

もちろん、「私」の故郷は津軽である、と言っても間違いではない。「私は津軽の人である。私の先祖は代々、津軽藩の百姓であつた。謂はば、純血の津軽人である」（序編）と「私」自身も述べているのだから。しかしながら、実際には「私」のみならず、多くの人々が〈故郷〉とされるものの一部分しか直接には知らないのである。直接には知らない土地を〈故郷〉と呼べるのか、と一たび真剣に考えてみれば、そこには幾らでも疑わしさが浮上するだろう。「私」の言説は、津軽＝〈故郷〉の内部に幾つもの切断線を走らせる。しかも「私」は、旧作を何作か引用しつつ[6]「金木、五所川原、青森、弘前、浅虫、大鰐」についての思い出を述べたあと、次のようなことまで述べるのだ。

この六つの町は、私の過去に於いて最も私と親しく、私の性格を創成し、私の宿命を規定した町であるから、かへつて私はこれらの町に就いて盲目なところがあるかも知れない。これらの町を語るに当つて、私は決して適任者ではなかつたといふ事を、いま、はつきり自覚した。以下、本編に於いて私は、この六つの町に就いて語る事は努めて避けたい気持である。私は、他の津軽の町を語らう。

多くの人は、「最も私と親しく、私の性格を創成し、私の宿命を規定した町」こそが〈故郷〉にふさわしいと考えるのではないだろうか。しかし、「私」はそれらの町について語ることは避け、「本編」においては他の町について語ろう、というのである。

だから「私」の自己規定は「旅人」に他ならない。[7]「私」は訪れた町についての印象を縷々記すものの、「ただ町を一巡しただけの、ひやかしの旅人のにはかに断定を下すべき筋合のものではないかも知れない」（五）、「旅の印象記などあてにならないものである」（五）と自身の印象が当てにならないものであることを繰り返し読者に示すのを忘れないのだ。

ここで柳田国男の議論を参照しておくのは無駄なことではないだろう。柳田は「一国民俗学」の理論的枠組を示した『民間伝承論』（共立社、一九三四・八）において、郷土研究の調査の対象について「地域を或程度まで小さく限ること」が必要であると言い、次のように述べる。

志あり又方法を解した篤学の士が隅から隅まで知り抜いた我部落、即ち「我町村」から始めるのがよいとさへ考へられる。［…］実際郷土研究は内部からでなければ出来ないもので、外部から働いたものは皆失敗に帰して居る。要は問はずして聞くといふ自然な方法がよいのであつて、従うて同郷人の調査が学的価値は多いのである。

柳田は、「外部」からの調査は失敗するのであり、「内部」から

しなければならないと述べる。なぜなら、「外部」からわかるのは目で見たり耳で聞いたりすることのできるものだけであり、その郷土の心理的・精神的なものは「内部」の者でなければわからないからだ。柳田の「内部」の範囲はきわめて小さく、「我町村」の単位から始めるのが適当であり、県では大きすぎ、郡でも或は大きすぎるかもしれないとさえ述べている。もちろんそれらは「全国的な比較総合の為の基礎の単位」であるとされ、つまりは〈日本人〉のエートスを探るための材料となるのだが、あくまでも調査の段階にあっては、同国人であっても郷土が違えば「外部」の存在とされるのである。(8)

自身が「旅人」であるということを強調している『津軽』の「私」は、こうした柳田の考えと案外近いところにあるようにも思われる。同じ〈津軽〉という地方であっても、自身が直接知らない場所を自身の〈故郷〉と見なすことに「私」は非常に抑制的なのだ。しかしながら、だとすれば余計に、なぜ「私」は自身がよく知っているという六つの町ではなく、その他の町を「本編」において主な対象にするというのか、その理由がよくわからなくなるのである。

先ほども述べた通り、「純血の津軽人」であるはずの「私」は、「都会人としての私に不安を感じ、津軽人としての私をつかまうとする念願」を持って旅に出ている。それならば「私」のよく知っている町こそが重要になってくるのではないか。そのような町について語ることを「努めて避けたい」というとき、「私」の目論見は初めから失敗が運命づけられているようにも思われるのだ。この書物のかなり早い段階で、「私」が次のように書いていることは示唆的であるだろう。

〔…〕津軽人とは、どんなものであつたか、それを見極めたくて旅に出たのだ。私の生きかたの手本とすべき純粋の津軽人を捜し当てたくて津軽へ来たのだ。さうして私は、実に容易に、随所に於いてそれを発見した。誰がどうといふのではない。乞食姿の貧しい旅人には、そんな思ひ上つた批評はゆるされない。〔…〕私はたいていうなだれて、自分の足もとばかり見て歩いてゐた。けれども自分の耳にひそひそと宿命とでもいふべきものを囁かれる事が実にしばしばあつたのである。私はそれを信じた。私の発見といふのは、そのやうに、理由も形も何も無い、ひどく主観的なものなのである。〔…〕とにかく、現実は、私の眼中に無かつた。「信じるところに現実はあるのであつて、現実は決して人を信じさせる事が出来ない。」といふ妙な言葉を、私は旅の手帖に、二度も繰り返して書いてゐた。

（二）

「私」は「私の生き方の手本とすべき純粋の津軽人」を至るところに発見したと述べており、つまりは「私」の目的は成功したかのように語られているのだが、それならばなぜ「私」は

「ひどく主観的」であるとか「信じるところに現実はあるのであつて、現実は決して人を信じさせる事が出来ない」などという思わせぶりな言葉をここに書きつけなければならないのか。

もちろん、まだ結論を出すには早いだろう。まずはこの旅が『津軽』という書物のなかでどのように描かれているのか、具体的に検討してみなければならない。

二、「大人」＝「都会人」からの脱却

『津軽』の「本編」は、「一　巡礼」、「二　蟹田」、「三　外ヶ浜」、「四　津軽平野」、「五　西海岸」の五部構成となっている。そのうち、「一　巡礼」から「三　外ヶ浜」までの箇所は一つのまとまりとして捉えることができる。以後、その箇所を〈北上パート〉と呼ぶことにしよう。急行列車で上野から青森へ行き、そこからバスで蟹田、今別、さらに徒歩で三厩を通り、竜飛まで行くというルートであり、つまりは「私」はそのパートにおいて、ずっと北上しているわけだ。そこから「四　津軽平野」では南下したあと金木へと赴き、「五　西海岸」では西に移動し、少し南下したあと、小泊まで再び北上することになる。そのような「私」の地理的移動と、『津軽』の内容は密接に関連しているように思われる。

「私」は「序編」において、次のように述べていた。

> 私はこのたびの旅行で見て来た町村の、地勢、地質、天文、財政、沿革、教育、衛生などに就いて、専門家みたいな知つたかぶりの意見は避けたいと思ふ。［…］それらに就いて、くはしく知りたい人は、その地方の専門の研究家に聞くがよい。私には、また別の専門科目があるのだ。世人は仮りにその科目を愛と呼んでゐる。人の心と人の心の触れ合ひを研究する科目である。

〈北上パート〉の記述は、まさしく「愛」の専門家としての「私」の面目躍如と言っていいものだろう。かつて「私」の家で働き、その後は青森の病院の職員となっているT君は、徴兵されて戦地へ行った際に肋膜炎が再発して内地へ戻ってきており、皆が酒を飲んでいるなかでも一人酒を飲まず、そして時々、軽く咳をしている。中学時代からの友人で、東京の雑誌社や保険会社に勤めたのち、現在は蟹田で生家の精米業を継ぎ、町会議員としても活躍しているN君は、亡くなった妹の子供三人を引き取り、自身の子供と同様に慈しみながら育てている一方で、酒に酔うと大声で歌をうたって周囲の人々を閉口させる。そのような以前からの友人知人の他にも、普段は人一倍はにかみやの繊細な人であるのに酒を飲みすぎてしまい、「私」をもてなそうとして「熱狂的な接待ぶり」を披露してしまう蟹田分院の事務長Sさんなども含めて、「私」が旅において触れあうさまざまな人々の性格や生き方というものが、〈北上パート〉においては

くっきりと浮かび上がるように描かれているのだ。

また、そのような旅の過程で、「私」自身が変容していることも見逃してはならないだろう。「一　巡礼」において、青森から蟹田行のバスに乗る際、「私」はT君に一緒に蟹田に行くことを提案したいのだが、できないでいる。

〔…〕昔の私ならば、気軽に言へたのでもあらうが、私も流石にとしをとつて少しは遠慮といふ事を覚えて来たせゐか、それとも、いや、気持のややこしい説明はよさう。つまり、お互ひ、大人になつたのであらう。大人といふものは侘しいものだ。愛し合つてゐても、用心して、他人行儀を守らなければならぬ。なぜ、用心深くしなければならぬのだらう。その答は、なんでもない。見事に裏切られて、赤恥をかいた事が多すぎたからである。人は、あてにならない、といふ発見は、青年の大人に移行する第一課である。大人とは、裏切られた青年の姿である。（一）

ここで「私」は、自身が「大人」になってしまったのだと述べているが、直後にT君は明日の朝に自分もバスで蟹田へ行くと「私」に告げる。「私」は思わず仕事は大丈夫かとT君に問うが、「あしたは日曜です」と言われ、「私たちには、まだたわいない少年の部分も残つてゐた」と述べるのだった。

「大人」という語は、「二　蟹田」においても登場する。「私」が蟹田のN君の家につくと、N君は「リンゴ酒でなくちやいけないかね。日本酒も、ビールも駄目かね」と言ってくる。

駄目どころか、それはリンゴ酒よりいいにきまつてゐるのであるが、しかし、日本酒やビールの貴重な事は「大人」の私は知つてゐるので、遠慮して、リンゴ酒と手紙に書いたのである。津軽地方には、このごろ、甲州に於ける葡萄酒のやうに、リンゴ酒が割合ひ豊富だといふ噂を聞いてゐたのだ。（二）

ここでも「私」は「大人」であるので遠慮するのだが、N君は「私」にそのような遠慮をさせないように振る舞い、「私」もだんだん「図々しくなつて」いく。〈北上パート〉において、「私」はさまざまな場所で、さまざまな人々ともに酒を飲み続けており、さながら酒中旅行とでもいうような趣さえ呈しているのだが、それは「私」が「大人」から「子供」（青年、少年）になったために可能となったのだと言えるだろう。そして、藤原耕作が適切に指摘するように、そのような大人／子供という二分法が、都会人／津軽人という二分法に重ねられていることもまた明らかだ。[9] 「私」は「大人」から「子供」へと変容するとともに、「都会人としての私」から「津軽人としての私」へと変容していくのである。

Sさんの「熱狂的な接待ぶり」を説明したあとで、「私」は次

のように述べる。

〔…〕私はSさんに依つて私自身の宿命を知らされたやうな気がして、帰る途々、Sさんがなつかしく気の毒でならなかつた。津軽人の愛情の表現は、少し水で薄めて服用しなければ、他国の人には無理なところがあるかも知れない。東京の人は、ただ妙にもつたいぶつて、チョツピリづつ料理を出すからなあ。ぶえんの平茸ではないけれど、私も木曾殿みたいに、この愛情の過度の露出のゆゑに、どんなにいままで東京の高慢な風流人たちに蔑視せられて来た事か。「かい給へ、かい給へや。」とぞ責めたりける、である。(二)

〈津軽人〉と「東京の人」とが対比されたうえで、東京に住んでいるはずの「私」はこの時、自身を完全に前者に属するものとして扱っている。蟹田は「私」にとっては未知の土地だったはずだが、そこで暮らす人々と「私」とは同じ〈津軽人〉であるという点で同じカテゴリーのなかに包含される。そして、自身を「大人」、あるいは「旅人」であるとする記述は「三　外ヶ浜」においては全く見られなくなるのである。

〈北上パート〉において「私」はさまざまな小さな失敗を繰り返すものの、それらは決定的な亀裂を生むようなことはなく、人々の善意に回収されていく。「三　外ヶ浜」において津軽の凶作の歴史が振り返られた際には、「哀愁を通り越して何か、わけのわからぬ憤怒さへ感ぜられ」るものの、そのすぐあとには橘南谿の「東遊記」の荒唐無稽と言っていいような記事が引用され、「お伽噺みたいな雰囲気」に彩られることになる。そして、津軽に義経の伝説が多すぎるのは、不良青年の二人組が義経と弁慶を騙って各地をうろついていたからではないかと想像し、「そんな不良青年の放浪生活が、ひどく楽しかつたもののやうに空想せられ、うらやましくさへなつて来」るのだ。基本的に多幸感とでもいうようなものが〈北上パート〉には漂っていると言ってよい。

だが、それが「四　津軽平野」になると変わってくる。〈私〉は竜飛から青森へと戻り、川部、五所川原を経て金木の生家へと辿り着く。「純血種の津軽人」(序編)や「私たちの祖先の血」(三)などと述べる「私」なのであれば、実際に血がつながっている生家こそ〈津軽人〉としての自覚を強めることのできる絶好の場所なのではないか。しかし実態は、その正反対となってしまったようだ。

久しぶりに会った「私」に対して兄たちが素っ気ない挨拶しか返さないのを「私」は「わが家の流儀である。いや、津軽の流儀と言つていいかも知れない」と言うものの、酒に弱くなってきたという兄たちが「上品にお互ひゆづり合つてゐる」のを見て、「外ヶ浜で荒つぽく飲んで来た私には、まるで竜宮か何か別天地のやうで、兄たちと私の生活の雰囲気の差異に今更のごと

く愕然とし、緊張した」と言い、「金木の生家では、気疲れがする」と述べるのだ。〈北上パート〉との落差は明らかだろう。兄たちと「私」とのあいだでは遠慮をしなければならない関係性があるようであり、「私」はまた「大人」へと戻らなければならないかのごとくなのである。

翌々日の鹿の子川溜池行きにおいては、「私」は「調子づいて話して皆を笑はせ」る快活ぶりを発揮するが、その場にいたのは姪の陽子とその夫、嫂、アヤという人々なのであり、そこに兄が遅れて参加すると途端にぎこちない雰囲気になってしまう。安藤宏が言うように、この兄たちとの関係性を契機として、『津軽』という作品が「大きく構造上の転換をとげていく」[10]のはどうやら間違いなさそうなのだ。

三、風景論

「三　外ヶ浜」から「四　津軽平野」へと至る過程において、にわかに〈日本〉あるいは〈天皇〉についての言及が多くなることにも注意しよう。「三　外ヶ浜」の最後の場面で「私」は童女の手毬唄を聞いて、「いまでも中央の人たちに蝦夷の土地と思ひ込まれて軽蔑されてゐる本州の北端で、このやうな美しい発音の爽やかな歌を聞かうとは思はなかつた」と胸を熱くする。さらに、「佐藤弘といふ理学士」の言説として「明治大帝の教育に関する大御心はまことに神速に奥州の津々浦々にまで浸透して、奥州人特有の聞きぐるしき鼻音の減退と標準語の進出とを促し、嘗ての原始的状態に沈淪した蒙昧な蛮族の居住地に教化の御光を与へ」たなどという文章が二度にわたって引用されるのである。[11] ここでは、「中央の人たち」に対して津軽のよさを訴えているかに見えながら、「中央」の価値観が無前提によいものとされ、標準語の発音こそが「美しい」ものであるとされていることは明らかである。

さらに「四　津軽平野」になると、「私たちの教科書」に津軽への言及がきわめて少なかったということが問題とされる。ここでの「私たち」というのは〈津軽人〉ではなく「中央の人たち」をも含んだ〈日本人〉ということであるようだ。そして北海道のアイヌとは違い、「奥羽のアイヌは、溌剌と独自の文化を誇り、或いは内地諸国に移住し、また内地人も奥羽へ盛んに入り込んで来て、次第に他の地方と区別の無い大和民族になってしまつた」という現在から見ると非常に問題含みな記述が肯定的になされるに至る。もはやここまでくると、「私」は完全に〈日本人〉としての視点から津軽をまなざしているのだと言うほかない。そして「私」は「考へてみると、津軽といふのは、日本全国から見てまことに渺たる存在である」と述べたうえで、生家へと帰還するのである。

生家への帰還に先立って、〈津軽人〉ではなく、〈日本人〉としての視点が前景化していくのは、[12]「故郷への愛着」から「うまし国たる日本を、あらためて見いださんがため」という「新風

土記叢書」の企画意図に沿ったものだとも言えるだろうが、「私」が〈津軽人〉にアイデンティファイする試みが生家において挫折したことに対する防衛機制のようなものと考えることもできるのではないか。〈津軽人〉という共同性や連続性を保証する概念が機能不全を起こしているからこそ、〈日本人〉というより上位の概念が必要とされるのである。「私」は生家において、兄とともに歩きながら、「十年ほど前」の出来事を思い出し、「私は兄から、あの事件に就いてまだ許されてゐるとは思はない」と書く。「私」は兄たちとともに同じ〈津軽人〉という一体感を得ることは不可能であることをあらためて思い知る。「ひびのはひつた茶碗は、どう仕様も無い。どうしたつて、もとのとほりにはならない」のだ。

「五　西海岸」に入ると、「私」は金木から五所川原へ行き、そこから列車で西へと進み、木造にある父親の生家を訪ねる。「私」の父親は、「Mという旧家の三男かであつたのを、私の家から迎へられて何代目かの当主になつた」のであり、「父に対する関心は最近非常に強くなつて来た」という「私」は、「死ぬまへにいちど、父の生れた家を見たくて」木造に来たのである。

そして「私」は、父の生家の間取りが「金木の家の間取りとたいへん似てゐる」ことを発見し、「死んだ父の「人間」に触れたやうな気がして、このMさんのお家へ立寄つた甲斐があつたと思」う。だが、それで「私」のアイデンティティが回復されはしない。「私」の亡き父との出会いはクライマックスにはなりえない。

「私」は木造から列車でさらに西へ進み、鰺ヶ沢を過ぎると日本海岸に沿って深浦まで南下していく。その途中、列車の窓から大瀬戸崎が見えるのだが、「謂はば全国到るところにある普通の「風景」になつてしまつてゐて、津軽独得の佶屈とでもいふやうな他国の者にとつて特に難解の雰囲気は無い」と「私」は述べる。それは外ヶ浜についての「私」の次のような記述を思い起こさせるだろう。

> 二時間ほど歩いた頃から、あたりの風景は何だか異様に凄くなつて来た。凄愴とでもいふ感じである。それは、もはや、風景でなかつた。風景といふものは、永い年月、いろんな人から眺められ形容せられ、謂はば、人間の眼で舐められて軟化し、人間に飼はれてなついてしまつて、高さ三十五丈の華厳の滝にでも、やつぱり檻の中の猛獣のやうな、人くさい匂ひが幽かに感ぜられる。昔から絵にかかれ歌によまれ俳句に吟ぜられた名所難所には、すべて例外なく、人間の表情が発見せられるものだが、この本州北端の海岸は、てんで、風景にも何も、なつてやしない。(三)

「私」にとっての「風景」とは「人間の眼で舐められて軟化し」たものなのであり、それに対して外ヶ浜は「風景」ではないものとされる。そのような外ヶ浜に対して、「私」は大瀬戸崎を

含む西海岸の南部は「風景」であると言い、「私などただ旅の風来坊の無責任な直感だけで言ふのだが、やはり、もうこの辺から、何だか、津軽ではないやうな気がするのである」（五）とまで述べるのである。そういえば、金木の生家に帰った際には、「私」は「眼前に展開してゐる春の津軽平野の風景には、うつとりしてしまつた」（四）などと述べていた。非「風景」である外ヶ浜と、「風景」である津軽平野、西海岸の南部という対比が看取される。そして後者は「津軽ではない」ものとされるのだ。

列車が深浦に着くと、「私」はまた次のように述べる。

この港町も、千葉の海岸あたりの漁村によく見受けられるやうな、決して出しやばらうとせぬつつましい温和な表情、悪く言へばお利巧ならやつかりした表情をして、旅人を無言で送迎してゐる。つまり、旅人に対しては全く無関心のふうを示してゐるのである。私は、深浦のこのやうな雰囲気を深浦の欠点として挙げて言つてゐるのでは決してない。そんな表情でもしなければ、人はこの世に生きて行き切れないのではないかとも思つてゐる。これは、成長してしまつた大人の表情なのかも知れない。何やら自信が、奥深く沈潜してゐる。津軽の北部に見受けられるやうな、子供つぽい悪あがきは無い。（五）

ここに来て、「風景」／非「風景」という二分法は、大人／子供という二分法と重ねられるのである。「風景」であり「大人」であるのが津軽平野や西海岸の南部であり、非「風景」で「子供」であるのが外ヶ浜を含む「津軽の北部」ということになる。そして〈北上パート〉において、大人／子供という二分法が都会人／津軽人という二分法に重ねられていたことを思い出すとき、「私」が次のように言い出す理由もまた明らかだろう。

ああ、さうだ。かうして較べてみるとよくわかる。津軽の奥の人たちには、本当のところは、歴史の自信といふものがないのだ。まるつきりないのだ。だから、矢鱈に肩をいからして、「かれは賤しきものなるぞ。」などと人の悪口ばかり言つて、傲慢な姿勢を執らざるを得なくなるのだ。あれが、津軽人の反骨となり、剛情となり、佶屈となり、さうして悲しい孤独の宿命を形成するといふ事になつたのかも知れない。（五）

つまり、真の〈津軽人〉とは「津軽の奥の人たち」ということになる。外ヶ浜を含む「津軽の北部」の人々こそが「子供」であり、〈津軽人〉なのだ。この個所以前と以後とで、〈津軽人〉という言葉の定義が変容していることに注意しなければならない。以前においては〈津軽人〉とは「都会人」と対比される存在であった。だが、もはやそうではない。「四　津軽平野」においては、「私」の兄たちも〈津軽人〉とされていたが、以後の認識からす

れば、津軽平野に住む人々は真の〈津軽人〉とは言い難くなる。そうであれば、「私」が兄たちとともに〈津軽人〉という一体感を覚えることができなかったのも当然のことだということにもなるだろう。

「私」がこのような認識に到達したのち初めてたけについて語りだすのは、だから、おそらく偶然ではない。「私」は深浦からまた鰺ヶ沢を通って五所川原まで戻ると、中畑さんのひとり娘のけいちゃんに「たけに逢はうと思ってゐるんだ」と唐突に言う。そして「私」は「故郷といへば、たけを思ひ出すのである。[…] こんどの津軽旅行に出発する当初から、私は、たけにひとめ逢ひたいと切に念願をしてゐたのだ」と書く。だが、それならばなぜ、ここに至るまでたけの名前はただの一度も出てきはしなかったのか。ある意味、「私」は正直である。「私」の書きぶりは「私」の言葉を裏切っている。たけの存在が俄かにクローズアップされてくる要因は、「津軽の北部」こそが真の〈津軽〉であるという認識に他ならない。そのことを、『津軽』の構成は如実に表しているのである。

四、「無憂無風の情態」

たけは、「私」が幼かったときにその子守を担当していた女中である。「私」は「思ひ出」のたけについての記述を引用することで、たけが自身の母親代わりであったことを読者に印象づけようとする。だが、「思ひ出」において、「私」の母親代わりは二人いたはずであり、しかも同作においては、たけよりももう一人の〈母〉である叔母のほうが重視されていたはずだ。それが『津軽』においては、叔母は直接登場することすらしない。そして、叔母よりもはるかに重要な存在として、たけが前面に押し出されてくる。真の〈津軽人〉とは「子供」である「津軽の北部」の人々だという認識に到達した「私」にとって、津軽平野に含まれる五所川原在住の叔母よりも、「本州の西海岸の最北端」である小泊にいるたけのほうが自身の〈母〉としてふさわしい存在に感じられるのであろう。[13]

「私」は五所川原から列車で金木を通り過ぎて終点の中里まで行き、そこからさらにバスで小泊へと北上する。その途上、バスの窓から外を見て「私」はこう思う。

> やつぱり、北津軽だ。深浦などの風景に較べて、どこやら荒い。人の肌の匂ひが無いのである。山の樹木も、いばらも、笹も、人間と全く無関係に生きてゐる。東海岸の竜飛などに較べると、ずつと優しいけれど、でも、この辺の草木も、やはり「風景」の一歩手前のもので、少しも旅人と会話をしない。

小泊へと続く道は、東海岸の北端である竜飛に比べれば「ずつと優しい」とされはするが「「風景」の一歩手前のもの」であ

り、それは真の〈津軽〉の証なのである。

小泊に着いた「私」はたけの家を訪ねると、留守であった。近所の人の話によれば、国民学校の運動会に行っているらしい。「私」は国民学校へ行くが、そこでの運動会の様子は次のように描かれる。

> 本州の北端の漁村で、昔と少しも変らぬ悲しいほど美しく賑やかな祭礼が、いま目の前で行はれてゐるのだ。[…]日本は、ありがたい国だと、つくづく思つた。たしかに、日出づる国だと思つた。国運を賭しての大戦争のさいちゆうでも、本州の北端の寒村で、このやうに明るい不思議な大宴会が催されて居る。古代の神々の豪放な笑ひと闊達な舞踏をこの本州の僻陬に於いて直接に見聞する思ひであつた。海を越え山を越え、母を捜して三千里歩いて、行き着いた国の果の砂丘の上に、華麗なお神楽が催されてゐたといふやうなお伽噺の主人公に私はなつたやうな気がした。

生家への帰還に先立って、「津軽といふのは、日本全国から見てまことに渺たる存在である」と記していたことは先述した通りだが、ここで「私」は真の〈津軽〉である「本州の北端」が日本全体においても決して等閑視してよい存在ではないことを示すために、ほとんど夢幻的なまでの光景を提示している。国民学校の運動会が「古代の神々の豪放な笑ひと闊達な舞踏」の場に様変わりしているのだ。

まさしく、クライマックスへと至る用意は整ったと言ってよい。探し回ったすえ、ようやくたけと再会した「私」は、「無憂無風の情態」を体験し、このような「不思議な安堵感」を「生みの母」は与えてくれなかったと述べる。つまりは、たけこそが真の〈母〉であると言いたいのだろう。そして「私」は気づく。

「ああ、私は、たけに似てゐるのだと思つた。きやうだい中で、私ひとり、粗野で、がらつぱちのところがあるのは、この悲しい育ての親の影響だつた」のだと。たけという〈母〉を通して、「私」はようやく〈津軽人〉にアイデンティファイすることができたのである。ようやく「私」は自身を連続性のなかに位置づけることができたのだ。それを幻想であると指摘しても仕方がない。「私」が言うように、「信じるところに現実はあるのであつて、現実は決して人を信じさせることはできない」のだから。

「私」にとっての〈津軽人〉とはネイションのようなものとしてある。〈津軽人〉と〈日本人〉とはイコールではないものの、前者は後者に包含されるものではあるだろう。『津軽』は〈津軽人〉なる概念が幻想でしかないことをあからさまに示してしまっているのだが、そうであれば〈日本人〉というネイションがなおさら幻想であることもまた明らかだ。しかも、『津軽』はそうした幻想にすがらざるをえない人物を描くことによって、ナ

ショナリズムの機制をも明らかにしていると言うことさえ可能かもしれない。ただ、だからと言って、『津軽』をナショナリズムを批判・相対化する作品として捉えることは適当ではない。「日本は、ありがたい国だと、つくづく思った」などという文にいかなるアイロニーをも認めることはできない。むしろ、「死」を前にしたときにナショナリズムが必要とされることを描くことは、「聖戦下の新津軽風土記」に実にふさわしいと言うべきではないだろうか。「私は虚飾を行はなかつた。読者をだましはしなかつた」という言葉は字義どおりに受け取るべきだろう。「現実」ではなく自身の「信じるところ」こそを描いた「私」にとって、それは心からの言葉だったはずである。

注

（1）　新風土記叢書については、紅野敏郎「「新風土記叢書」とその周辺」（『文学』一九八三・一〇）、吉岡真緒「「風土記」の系譜――『津軽』の感覚」（斎藤理生・松本和也編『新世紀太宰治』双文社出版、二〇〇九・六）、高橋孝次「『明石』と『津軽』――新風土記叢書の「郷土」」（千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書」二〇一六・二）などを参照。

（2）　北河賢三「一九三〇年代の思潮と知識人」（『近代日本の統合と抵抗4』日本評論社、一九八二・六）

（3）　高橋前掲論文は「読者が「郷土」の〈共同性〉を、「郷土的文学」を媒介として享受するというプログラムで、最終的には「日本人」という〈共同性〉を再発見させようという意図」を指摘している。

（4）　ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』（NTT出版、一九九七・五）

（5）　大久保典夫『『津軽』論ノオト」（東郷克美・渡部芳紀編『作品論太宰治』双文社出版、一九七四・六）、東郷克美「〈津軽〉論――周縁的世界への帰還」（『太宰治という物語』筑摩書房、二〇〇一・三）。

（6）　太宰の旧作である「思ひ出」（「海豹」一九三三・四、六、七）や「おしやれ童子」（「婦人画報」一九三九・一一）が引用される。「思ひ出」は安藤宏『『晩年』と〝津軽〟」（『太宰治論』東京大学出版会、二〇二一・一二）が指摘するように「具体的な場所や地名に関する情報（固有名詞）は注意深く省かれている」のだが、『津軽』においては「思ひ出」が引用されるたびに「私」によってそうした情報が補填されていくのである。

（7）　山口浩行「旅人が見る故郷――風土記としての〈津軽〉」（「日本近代文学」二〇〇二・一〇）は、「未知なる故郷」の旅人は、常套的な手段と一線を画し、ノスタルジアの利用を封印することで、「私」の印象に残る過去との対比という構図は［…］用いられないことになる」と指摘している。

（8）　永池健二『柳田国男――物語作者の肖像』（梟社、二〇一〇・七）は、柳田には「郷土の割拠性、固有性の認識」と「郷土の同質性への眼差し」とがあり、「この二つの視点は、明らかに異質である」が、「この両者は微妙な緊張を孕みながら、柳田独特の郷土観を形づく」っていると指摘している。

（9）　藤原耕作「太宰治〈津軽〉をめぐって」（「叙説」一九九八・八）

（10）　安藤宏「〈津軽〉の構造」（前掲『太宰治論』）

（11）　引用元は『日本地理風俗大系　第四巻　関東北部及奥羽地方』（新光社、一九二九・四）だが、安藤宏「〈津軽〉の　構造」

〈前掲〉はそれと『津軽』の引用文とのあいだに著しい違いがあることを指摘している。引用元には「かしこくも明治大帝の教育に関する大御心は」などという表現は全く見られないのである。

（12）　ただし〈日本人〉という語それ自体は、『津軽』において「東遊記」の引用以外には出てこないことには注意したい。「私」は〈日本人〉の視点を隠微に導入しつつ、表立っては〈津軽人〉という語しか使用しようとはしないのである。

（13）　実際に太宰治にとって、叔母とたけとは、どちらが重要な存在であったかはわからない。「思ひ出」という作品の論理からすれば叔母が重視され、『津軽』という作品の論理からすればたけのほうが重視されるということである。